時の刻みは ～震災6年 岩手・大槌から～

① 再建途上

東日本大震災直後の岩手県大槌町沿岸部

復興の実感 まだない

2月上旬、岩手県大槌町。吹き付ける冷たい風に身をすくめつつ、高台から沿岸部を見渡した。広大な更地のあちこちで建設工事が進み、ショベルカーがごう音を響かせる。

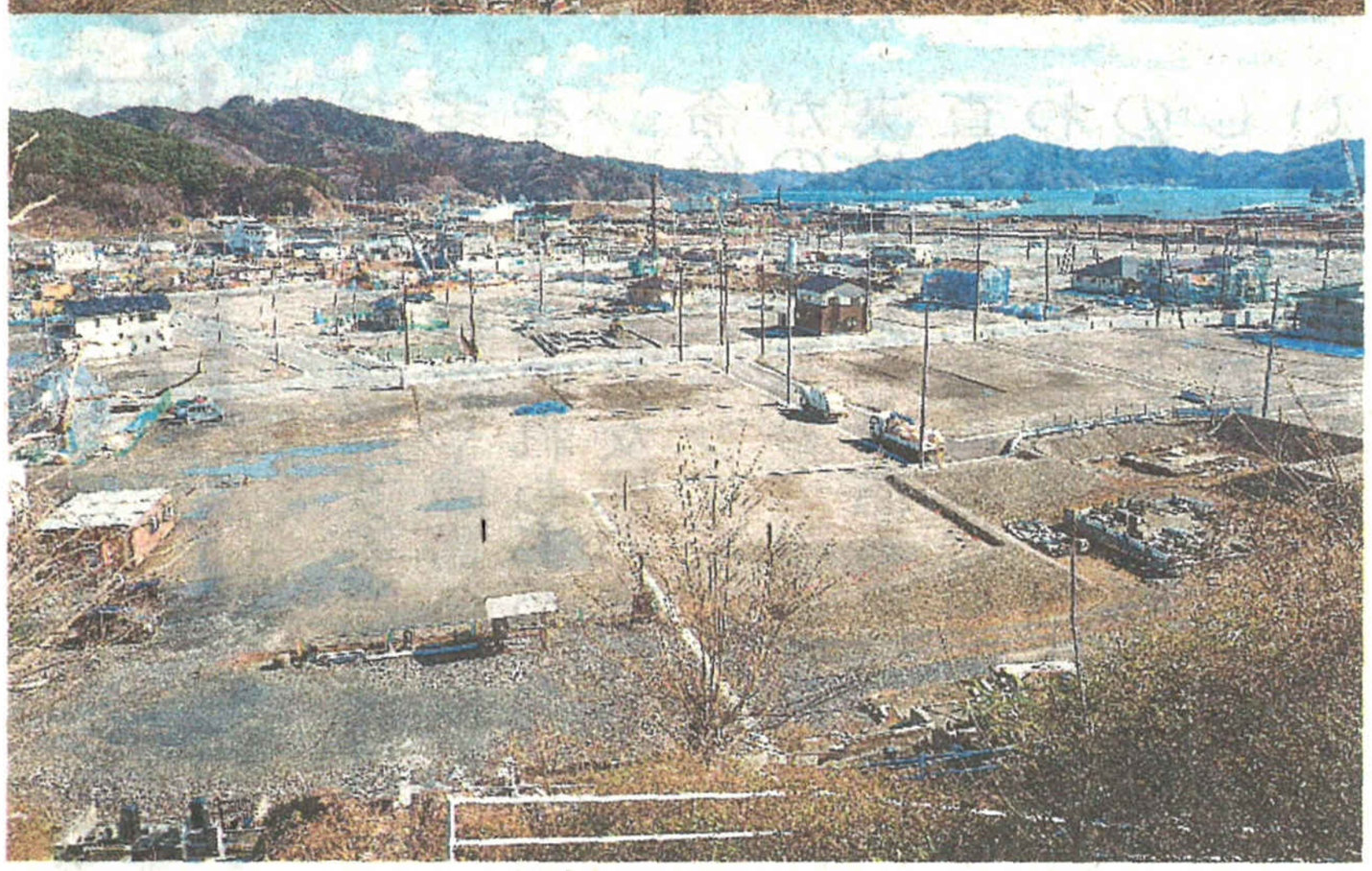
2011年3月11日の東日本大震災で、この町の中心部は壊滅的な被害を受けた。1年前に訪れたときは何もなかった土地に、住宅がぽつぽつと立っている。

「盛り土によるかさ上げ工事が進み、やっと住宅が建てられるようになった」。地元の菊池公男さん(77)が白い息を吐きながら言った。復興の歩みを記録しようと、震災直後から町の風景をカメラに収め続け、その変化をつぶさに見てきた。

菊池さんの案内で車を走らせると、地面がアスファルトで舗装され、新しい学校や病院のほか、大きな集合住宅も立っている。復興はかなり進んでいるように思えるが、菊池さんはそうは受け止めていない。

「外から眺めれば、だいぶ復興しているように見えるかもしれんなあ。でも、ここに住むわしらに、そこまでの実感はない」

「あの日」から間もなく6年。住まいや商店の再建に向けた整備が進む一方、住民が抱える課題はいまだ山積している。昨年取材した国際医療ボランティアAMDA（岡山市）の現地拠点や住民らのその後を追い、被災地のいまに迫る。（秋山昌三）



被害を受けた町中心部では、昨年2月（写真上）と比べて再建された住宅が目に付いた（写真下＝今年2月）

35面に続く